

きょうだいを亡くした中学生・高校生のセルフヘルプグループ 参加による心理的支援の効果の検討

The effects of psychological supports by self-help group among adolescents who lost their brother

瀬野 彩子 (Ayako Seno) 指導：大月 友

【問題】

きょうだいを亡くした子どもにとって、その心理的影響は避け固いものがある（瀬藤・坂下・黒川・井上・山田・森島, 2008）。

死別体験者の精神的拠り所としてはセルフヘルプグループがある。だが、きょうだいを亡くした子どもが、セルフヘルプグループへ参加することの心理的效果に関して検討した研究は存在しない。そこで、きょうだいを亡くした中学生・高校生10人を対象として、彼らの週1回、全4回のセルフヘルプグループの参加による心理的支援の効果の検討をした。

【方法】

調査対象者 中学生男子が2名、中学生女子が2名、高校生男子が2名、高校生女子が4名であった。

測度 きょうだいを亡くした中学生・高校生のセルフヘルプグループの参加による心理的变化を測度するために日本版STAI（肥田野・福原・岩脇・曾我・Spielberger, 2000）を用いた。

セルフヘルプグループの内容 11時より全員で昼食をとり、13時よりきょうだいを亡くした中学生・高校生だけで話し合った。16時より、スタッフによるきょうだいを亡くした中学生・高校生に向けたデス・エデュケーションを行い、それに対して彼らが意見や感想を述べた。また4回目には、彼らによる他のきょうだいを亡くした中学生女子へのメール相談を行った。

手続き 都内で運営されている子どもを亡くした親を対象としたセルフヘルプグループにおいて、きょうだいのセルフヘルプグループへの参加を募集した。参加希望者とその保護者に対して、セルフヘルプグループで得られた資料を研究データとして使用する承諾を得た。

セルフヘルプグループ参加による効果を検討するため、1回目の実施前（Pre）と4回目の実施後（Post）に心理的状态を測定するためSTAIのアンケートをとった。更に4回目の実施の1ヶ月後（Follow up）にSTAIのアンケートをとった。POST時とFollow up時には、セルフヘルプグループに対する感想を自由記述にて求めた。

【結果】

まず、時期（Pre/Post/Follow up）を独立変数、状態不安得点を従属変数とした1要因被験者内計画の分散分析を実施した。その結果、時期の主効果が有意であった（ $F(2,18) = 17.02, p < .01$ ）。多重比較の結果、PreとPost（ $p < .01$ ）、PreとFollow up（ $p < .01$ ）において、有意な差が認められた。同様に、特性不安得点を従属変数とした1要因被験者内計画の分散分析を実施した（Fig.）。その結果、時期の主効果が有意であった（ $F(2,18) = 13.00, p < .01$ ）。多重比較の結果、PreとPost（ $p < .01$ ）、PreとFollow up（ $p < .01$ ）において、有意な差が認められた。

【考察】

セルフヘルプグループによって遺族サポートは見出せ、このことは瀬藤他（2008）、大久保他（2011）が危惧する死別した家族の悲嘆の放置という現状の打開の一つにも繋がると推測する。

しかし、セルフヘルプグループという一種の閉鎖性をもったグループであるだけに、研究対象者以外は入室出来ないという難点があり、介入し辛いところはある。だが、心理的支援の効果を上げるためには、それぞれのセルフヘルプグループで行なわれている企画の効果の検討と、それらを選択して活用できる環境が必要と考える。

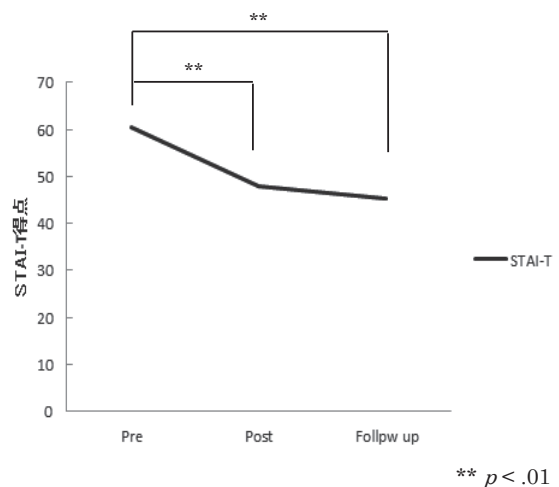


Fig. 特性不安得点の変化